

中国四国心理学会における学部生研究発表について

川野 卓二

(徳島大学 高等教育研究センター)

はじめに

2014年に広島大学で開催された中国四国心理学会第70回大会において企画された学部生研究発表会は、学部生が自分たちの研究を発表する機会として実施されている。卒論やグループ演習などで研究を計画中であったり、すでにデータがあったりする学生が発表できる場となっている。当初は、原稿等の提出は不要であり、ポスター発表形式のみで、学会が認める研究業績には該当しなかったが、2016年に東亜大学で開催された第72回大会から抄録原稿の提出などの要件を満たすと正式発表として認められるようになり、学会ホームページに抄録が掲載されている。

中国四国心理学会で正式な発表と認められるための条件として、1. 研究計画だけでなく、データや資料等の分析が行われ、発表内容に考察まで含むこと。2. 論文集原稿を提出することが挙げられている。また、原稿の形式や提出締切は、一般研究発表と同様となっている。学部生時代に関わる主な研究は卒業研究である。この「学部生研究発表」へ発表申込の締切は8月下旬に設定されており、中国四国心理学会は通常、秋の季節に開催される。

今回の報告は、これまでの「学部生研究発表」に関する大会プログラムや学会ホームページにある情報をもとに振り返り、その申込状況や発表状況を整理し、関わる指導教員や大学数などの変化傾向を確認することを通じて、これからの方向性について考察することを目的とする。

方法

学部生研究発表に関して第70回から第75回までの中国四国心理学会の大会プログラム、もしくはウェブサイトから入手可能な、発表責任者名、および指導教員名（複数の教員名がある場合は、第一指導教員名）、所属大学名の情報を整理した。また、学会ウェブサイトの学会論文集（第49巻から第51巻）の情報から、正式な発表と認められた発表に関する情報を第70回から第72回大会までの前半と、第73回から第75回大会までの後半に分けて整理した。

結果

第70回大会に始まった学部生研究発表は、今年で6回目を迎える。第70回大会と第71回大会の発表数は大会プログラム上の数値であり、実際

の発表数と異なる可能性があるが、確認できなかった。これまでの5回の大会で142件の発表が計画されたことになる。第72回から第74回大会の期間で抄録原稿の提出等の条件を満たすことで正式発表と認められた件数が54件(68%)となっている。(表1.)発表を行ったが論文集用の抄録原稿を提出しなかった件数に関する情報は見当たらなかった。

表1. 学部生研究発表数の推移

回	会場校	発表数(会場校発表数)
70	広島大学	27(10) (*)
71	広島修道大学	36(1) (*)
72	東亜大学	24(2) (*) 17(1) (°)
73	徳島大学	20(3) (*) 12(0) (°)
74	広島国際大学	35(5) (*) 25(4) (°)
75	香川大学	18(0) (*) (**)

※ *:大会プログラム上の値であり、実際の発表数と異なっている可能性がある。

※ °:学会ウェブページ上の値であり、正式発表数である。

※ **:現時点で正式発表数は未集計である。

前半3回のまとまりと、後半3回のまとまりとに分けて、学部生研究発表へ参加を予定した大学数の変化を整理した結果、全期間を通じて19大学からの発表申込があり、その内9大学は、前半、後半ともどこかで申込を行っていた。残りの5校は、前半のどこかだけで発表を希望し、残りの5校は、後半のどこかだけで発表の希望があった。この変化は統計的に有意ではなかった。(t(17)=1.58, p>0.10, n.s.)

しかし、指導に関わった44名の教員の関わり状況の変化を、前半、後半に分けてみた場合、統計的に有意な変化が見られた。(t(42)=5.25, p<0.001)

考察

学部生研究発表は、学会が開催される秋の時点でデータや資料等の分析を行い、発表内容に対する考察までも含んだ抄録原稿を提出することが求められており、関わる教員にとっても少し敷居が高いように見受けられるが、学生にとっては発表の際の意見交換などを通じて心理学研究への理解を深め、大学院等への進学につながるよい機会になっていると思われる。正式発表とならなくても、構想段階のものも含めて発表が可能であるので、今後、より多くの学生がこの機会を活用することが期待される。